# 16 『伊曽保物語』

ある時、、を求めかねて、ここかしこさまよふ所に、、をくはへて木の上にをれり。狐、心に思ふやう、「我、この肉を取らまほしく」（ア）覚えて、烏のをりける木の本に立ち寄り、「＊いかに、＊。御身はよろづの鳥の中に、すぐれて美しく見えさせおはします。しかりといへども、①少し事足りはぬ事とては、御声の鼻声にこそれ。ただし、このほどに申せしは、『御声もことのほか、よく渡らせ給ふ』など申してこそふ。＊あはれ、聞かまほしうこそ侍れ」と申しければ、烏、②この義を、（イ）げにとや心得て、「さらば、声をださん」とて、口をけけるひまに、つひに肉を落としぬ。狐、これを取りて逃げ去りぬ。

語注

いかに＝もしもし。相手に呼びかける言葉。

御辺＝あなた。

あはれ＝ああ。感嘆を表す言葉

要約

　狐がえさを求めてさまよっていた折、肉をくわえた烏を見つける。狐は一計を案じ、烏をおだてあげ、肉を横取りする。

問1　波線部（ア）・（イ）について、本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ次から選べ。（4点×2）

（ア）　覚えて

ア　記憶していて

イ　わかって

ウ　信じて

エ　思って

〔　　　〕

（イ）　げに

ア　つまらない

イ　なるほど

ウ　変だ

エ　さすがに

〔　　　〕

問2　二重傍線部「候ふ」について、本文に合った形に活用させよ。（6点）

〔　　　　　　　　〕

問3　傍線部①「少し事足り給はぬ事」とあるが、それは何か。本文から五字で抜き出せ。（12点）

〔　　　　　　　　〕

問4　傍線部②「この義」とは、「この道理」という意味である。どのような道理か、最も適当なものを次から選べ。（12点）

ア　烏の声が実はよい声で、それを聞きたいという者がいるということ。

イ　烏の姿は美しいが、唯一の欠点はその声であるということ。

ウ　烏の声が聞こえたので、狐がわざわざ聞きにやって来たということ。

エ　烏は鳥の中で最も声が美しいため、称賛されているということ。

〔　　　〕

問5　本文の内容は、人々にどのような教訓を与えているか。最も適当なものを次から選べ。（12点）

ア　人が褒めてくれた時ほど、その言葉にうぬぼれることなく気を引き締めるべきである。

イ　人が褒めてくれた時には、その言葉をすべて信じると、後々幸せな人生が送れる。

ウ　人は自らが不幸な時ほど、他人に自らの短所を指摘してもらうようにするとよい。

エ　人は自らが不幸な時ほど、他人の長所を探し褒めると、やがて幸せがやってくる。

〔　　　〕

練習問題〈係り結び〉

文中に係助詞「ぞ」「な」「む」「や」「か」「こそ」があると、文末の活用形は終止形ではなく、次のような形となる。

ぞ

な

む　　→連体形

や

か

こそ　→已然形

次の空欄に「清し」を正しく活用させて入れよ。

①　川ぞ　（　　　　　　　）。

②　川なむ（　　　　　　　）。

③　川や　（　　　　　　　）。

④　川こそ（　　　　　　　）。

⑤　川か　（　　　　　　　）。

【解答】

問１　（ア）＝エ

　　　（イ）＝イ

問２　候へ

問３　御声の鼻声

問４　ア

問５　ア

【練習問題解答】

①清き　　②清き　　③清き　　④清けれ　　⑤清き